ない。恰もよし此の岩窟を見つけたので、**イモヂン**はその中には誰か食物を呉れる人がゐるだらうと思ひながら這入つて行つた。中には誰も居なかつたがあたりを見廻すと冷肉があつたので飢の苦しさの餘り、馳走を受けるのも待たずに、座つて食べ始め、獨語を言つた。「あゝ男の生活と言ふものは何といふ退屈なものなんだらう。二晩續けて地べたを褥に寢たものだから、すつかり疲れてしまつた。しかし之も私の決心のお蔭だつた。さもなけりや病氣になつたに違ひない。**ピサニオ**が山の頂上から**ミルフオード、ヘブン**を指して呉れた時には、つい近くの樣に見えてゐたのに」。それから又夫の事やその殘酷な命令の事などを想ひ出しては「私のいとしい**ポストユーマス**、お前は何故嘘をつくのです。」と言つた。

父の**ベラリウス**と獵に出てゐた**イモヂン**の二人の弟達は、此の時家へ歸つて來た**ベラリウス**は二人に**ポリドア**と**カドウオル**と言ふ名をつけてゐたので、二人共**ベラリウス**が眞の父でないと言ふ事などは一向知らなかつた。

ベラリウスが最初に窟(いはや)に入つて**イモヂン**を見たので二人を止めて言つた。「未だ這入つちやいけない。誰か私達の食物を食べてゐるものがおる。ひよつとすると妖精かも知れない。」

「何うしたんです、お父さん」と若者達が言ふと「南無三寶。天使が窟の中に來てゐるのだ。でなけりや世にも類のない美くしい人間だ。」男の服を着てゐた**イモヂン**はそんなに美くしく見えたのである。

王女は人聲を聞いたので窟から出て來て人々に言ひかけた。「旦那樣方。何うぞ私を打たないで下さい。あなた方の窟へ這ります前は、今食べましたものを貰ふなり買ふなりしやうと思つてゐたのです。本當に何も盜みはしませんし、又金貨が床に轉つてゐましたけれども、盜まうとも思ひませんでした。是は食物の代價です。私は食べてしまつたらこれを置いて、食物を與へて下さつたあなた方の爲に祈りを捧げて出て行かうと思つてゐたのでした。」

どんなに言つても皆は金を受取らなかつた。で憶病な**イモチン**が言つた。「私に對して怒つてらつしやるのですね、然し皆様、私を殺されるにしましても私があれを食べなかつたら死んでゐたと言ふ事丈は覺えて置いて下さい。」

「お前さんは何處へ行くんです。そして名は何といふんです」と**ベラリウス**が尋ねた。

「私は**フイデイル**と申します。伊太利へ行く親類の者が御座いまして、**ミルフオード**、**ヘブン**から船出致しますので私はそこへ行く途中で御座いますが、飢のために死にさうになりましたので、この様な不都合を致しました次第で御座います。」

「どうか若衆、私達を客商漢だと思つては下さるな。又私達が住んでる家から判斷して心の良くない者だなぞと思つては下さるな。ようこそ此處へいらつしやいました。もうすぐ日も暮れますから出發前に御馳走を致しませう。それを食べてからお立ちなさい。おい子供達、お待遇をしなさい。」

優しい兄弟達は色々と親切に話しながら**イモチン**を窟の中へと招じた。兄弟の様に貴女を愛します。(實は貴君と言つた。)と言ひながら、皆で窟の中に這つた。**イモチン**は弟達が持つて歸つた狩の獲物を、主婦らしい器用さで、夕飯の用意の手助けをして皆を喜ばせた。今では身分の高い婦人が料理を稽古する様な習慣はないが、當時は皆稽古したものであつて、**イモチン**は特に料理が上手であつた。**フイデイル**は弟達が褒めて言つた様に**ジユノー**神が病氣になつたので、**フイデイル**がその料理番になつたかと思はれる程、上手に野菜を色々な形に刻んだり、肉汁の味をつけたりした「その上全く天使の様に歌ふよ」と**ポリドア**が弟に言つた。

弟達は又、**フイデイル**が非常に嬉しそうに笑つてゐるけれども、悲しみと忍耐とが心を占領してゐるかの様に、悲しそうな憂鬱さが**フイデイル**の美くしい顔を曇らせてゐると話し合つた。

イモチンの優しい性質のために(或は多分血が續いてゐた爲かも知れない。勿論

二人は**イモヂン**だと知らなかつたけれど）弟達は王女を（**フイデイル**と呼んでゐた）非常に慕つたし、**イモヂン**もそれに劣らず弟達を愛した。若しいとしい**ポストユーマス**の記憶さへなければ、一生この林中の青年達と一緒にこの窟の中で生死してもよいと思つた程であつた。兎に角旅の疲れが治つて、**ミルフオード**、**ヘブン**へ行けるやうになるまで止めて貰ふ事に同意した。

獲つて來た肉類を食べ盡して、皆が再び獵に出やうとしてゐた時、**フイデイル**は未だすつかり良くなつてゐなかつたので一緒に行く事が出來なかつた。明かに夫の慘酷な仕打ちに對する悲しみと、旅の疲れとがその病氣の原因であつた。

青年達は**イモヂン**に別れを告げて獵に出掛けた。その途々若い**フイデイル**の氣高い性質や優やかな振舞ひを譽めた。

イモヂンは獨りになると直ぐ**ピサニオ**から貰つた藥の事を想ひ出して、それを呑み、直ぐに死の樣な深い眠りに落ちてしまつた。

ベラリウスと弟達が獵から歸つて來た時、**ポリドア**が最先に崛の中へ這入つたが王女が眠つてゐるのだと思ひ、音を立てゝ眼を覺させては惡いと思つて、はいてゐた重い靴を脱いだ。こんなに眞の優しさが王子らしい森人達の心に湧いてゐたのであつた。然し間もなくどんな音を立てゝも王女が眼を覺さない事に氣が附いたのできつと死んだのだらうと思ひ込んでしまひ、**ポリドア**は子供の時分から一緒に育つた兄弟の樣な悲しみを以て**イモヂン**の死を悼んだ。

、**ベラリウス**も亦、森の中へその屍を運んで行き、歌や嚴そかなお經等で當時の習慣通り葬式をしやうと言ひ出した。

イモヂンの弟達は姉を小暗い森蔭に運んで行き、草の上に靜かに屍を寢かせ、死んだ王女の魂の爲に歌を歌つた。そして屍を美くしい花や草の葉を以て埋めて**ポリドア**は言つた。**フイデイル**よ、夏毎にそして、私の生きてゐる限り、私は毎日あなたの墓を訪ねやう。あなたの顏の色の樣に靑ざめた櫻草や、あなたの靜脈の樣な色

の桔梗や、あなたの息よりもやはらかな薔薇の葉等を、あなたの上に振り散らしてあげやう。又花のない冬には毛皮の様な苔であなたの屍を覆うてあげやう。」

皆は葬式をすませると非常に悲しげにそこを去つた。

イモヂンはそこに長くは眠つて居なかつた。間もなく薬の効果が消えて目が覺めた。そしてたやすく弟達がかけて置いた花や葉の輕い蓋ひを振ひおとして立上り、夢を見ていたのではなかつたかと訝かりながら言つた。

「私は崛の番をして、親切な人達に料理をして上げたり等してゐた筈だのに。何うして此んな所へ來たのだらう。花に埋つたりして。」元の崛へ歸る途を見附ける事が出來ず、新らしい友人達も皆目見えなかつたので、きつとあれは皆夢だつたと思ひ込んだ。そして**イモヂン**は何時かは**ミルフオード**、**ヘブン**に着いて、伊太利へ行く船に乘込むことが出來るだらうと望みながら、再び物憂い旅路に上つた。

王女は今尙夫の**ポストユーマス**の事ばかりを考へてゐて小姓に變裝して夫に會は

うと思つてゐたのである。

然るに此時**イモヂン**が夢にも知らなかつた大事件が起つてゐた。羅馬の皇帝、**オウガスタス**、**シーザア**と**ブリテン**國王**シンベリン**との間に不意に戰爭が始まり、羅馬の軍隊が**ブリテン**に上陸侵入して、丁度**イモヂン**が旅行してゐた森に向つて進軍して來たのである。此の軍隊の中には**ポストユーマス**も從軍してゐた。

ポストユーマスは羅馬の軍隊と一緒に**ブリテン**へ來たのではあつたが、羅馬人の味方をして本國人と戰ふつもりでなかつたのみか、寧ろ、**ブリテン**の軍隊に投じて自分を追放した王の爲に戰はうと思つてゐた。

ポストユーマスは未だ**イモヂン**が自分に不實であつたものと信じてはゐたが、あれ程迄に愛してゐた彼女の死が、しかも自分が命じて殺させたと言ふ事が（**ピサニオ**は、命令通りに**イモヂン**を殺したと手紙で書き送つた）心を苦しめた。それで戰死するか、追放から歸つて來たと言ふ罪で、**シムベリン**の爲めに殺されるか、何れ

かその一の死を望みながら**ブリテン**へ歸つて來たのである。

イモヂンは**ミルフオード**、**ヘブン**に着く前に羅馬軍の手に捕はれたが、王女の氣品や擧止が皆の氣に入つたので羅馬の將軍**ルシアス**の小姓にされた。

シムベリンの軍隊も敵と接戰するために進軍しつゝ、丁度此の森に來た時、**ポリドア**と**カドウオル**とは王の軍隊に投じた。二人共自分の本當の父の爲に戰はうとしてゐるのだとは、夢にも思つてゐなかつたが、只勇敢な行爲を好んで從軍したに過ぎなかつた。父の**ベラリウス**も亦戰爭に參加した。彼はもう長い間**シムベリン**の王子を盜み出した罪を深く悔ひて居り、その青年時代に武士であつたのでその罪亡ぼしに自分が害を加へた王の軍隊に喜んで參加したのである。

兩軍の間に激戰は始まつた。**ポストユーマス**と**ベラリウス**及びその子の二兄弟の人間業とも思はれない勇敢な働きが無かつたならば、**ブリテン**軍は破れ、王は殺されたに違ひなかつた。彼等は王を守り、王の命を救つた。そのため戰運は一變して

遂に**ブリテン**軍の大勝利となつた。

戰が終つて後、戰爭中に死ぬ事が出來なかつた**ポストユーマス**は、追放の命を破つて歸つて來た刑罰として、喜んで死刑を受けやうと思つて、**シムベリン**の士官の一人の許へ自首して出た。

イモヂンと彼女の仕へてゐた將軍とは捕虜になつて、**シムベリン**の前へつれ出された。其處には王女の仇敵で、羅馬の士官になつてゐた**イアキモ**も同樣に引き出されて居り、是等の捕虜が王の前にゐた時**ポストユーマス**も死刑の宣告を受ける爲にやつて來た。然も又この不思議な廻り合はせの所へ、**ベラリウス**は**ポリドア**及び**ガドウオル**と一緒に、王の爲に盡した殊勳に對して適當な報賞を受けるために**シムベリン**の前に來てゐた。王の侍從の一人である**ピサニオ**が其の場に居た事は勿論である。

だから今、王の前には（皆思ひ〳〵の希望や恐怖を抱きながら）**ポストユーマス**

イモヂンとその新主人、羅馬の將軍、忠實な家來**ピサニオ**、僞友**イアキモ**、**シムベリン**の二王子、それから二人の王子を盗み出した**ベラリウス**とが立つてゐたのである。

羅馬の將軍が一番先に口を開いた。その他の人達の中には胸の皷動を打たせながら默々として立つてゐた者もあつた。

イモヂンは**ポストユーマス**が百姓の風をしてはゐたけれども、すぐに見附けることが出來たが、**ポストユーマス**は王女が男の服を着てゐたので見分ける事ができなかつた。王女は又**イアキモ**を認め、その指に自分のだつたと思ふ、指輪をはめてゐるのを見たが、自分のこんな不幸の發頭人はこの男であると言ふ事は知らなかつたそして自分はまことの父の前に捕虜となつて立つてゐた。

ピサニオは**イモヂン**を知つてゐた。**イモヂン**に男の風をさせたのは**ピサニオ**自身であつたからである。そして一人で考へた。

「お姫樣だ。然し生きて居られるのを見た以上は成り行く儘に委せて置かう」

ベラリウスも王女を見覺えてゐた。で、こつそりと**カドウオル**に言つた。

「あの少年は生き返つたのぢやないか」

「瓜二つといふ諺があるが、あのやさしい薔薇色の少年と、死んだ**フイデイル**と程よく似て居るものは知りません。」

と**カドウオル**が言ふと。

「死んだあの男が生き返つたのに違いありませぬ」。と**ポリドア**も言つた。

「靜かに、靜かに。若しあの少年だつたとしたら、今迄に我々に話し掛けたに違ひない」と**ベラリウス**が言ふと、

「然し本當に死んだ所を見たんだがなあ。」と**ポリドア**が囁き、「靜かに」と**ベラリウス**が遮つた。

ポストユーマスは默つてすぐにも死刑の宣告を受ける事を待ち望んでゐて、決し

て王に自分が戰爭中に王の命を救つたのである事を打明けまいと思つてゐた。打明ければ王は心を動かされて**ポストユーマス**を許す事は判つてゐたからである。

イモヂンを自分の小姓として保護してゐた羅馬の將軍**ルシアス**は、(前にも言つた樣に)最先に口を切つた。この將軍は非常な勇氣と氣高い品位とを持つてゐたので王に向つて次の樣に述べた。

「私は陛下が捕虜を赦さず、總てを殺してしまはれると言ふ事を聞きました。私は羅馬人だから、羅馬魂を以てその死に耐へませう。然し唯一つお願ひしたい事があります」と言つて**イモヂン**を王の前へ連れて來て「此の少年は**ブリテン**生れであります。この少年を赦してやつて下さい。これは私の小姓です。この樣に親切で、義理堅く、何んな場合にも勤勉で、眞實で優しい小姓は又とありますまい。羅馬人に仕へては居りましたが、**ブリテン**人には唯の一人にも害を加へませんでした。誰よりも先づこの子を救つてやつて下さい。」

シムベリンは熱心に王女**イモヂン**を見た。變裝してゐたので娘だとは氣が附かなかつたが、然し自分の心の内に全能の大自然が囁いてゐる樣な氣がして言つた。

「何處かで確かにあの男を見たに違ひない。あれの顏には見覺えがある。何故だか、又何處で見たのだかは判らないが。お前の命は赦してやらう。そしてお前の願ひがあらばそれも應へてやらう。例へそれが予の貴重な捕虜の命を乞ふのであつても。」

「誠に有難う存じます、陛下。」と**イモヂン**は言つた。

此の場合一つの願ひを叶へるといふ事は、その特典が與へられた人に、どんなものであつても一つの物を與へやうと約束した事に外ならなかつた。皆はこの小姓が何を願ふだらうと片唾を飲んでゐた。そして主人の**ルシアス**は言つた。

「私は私の命を助けて呉れとは言はないが、お前はきつとそれを願ふだらうね。」

「いゝえ、いゝえ。私は他にどうしてもせなけりやならぬ事があるのです。主人

あなたの命を乞ふ譯には行きませぬ。」

此の少年が恩を忘れてしまつた樣に見えたので羅馬の將軍は驚いた。

イモヂンは**イアキモ**をじつと見つめて、**イアキモ**が何故その指輪を指にはめて居るかといふ譯を告白させて下さいと願つた。

シムベリンは此の願ひを承諾し、そのダイヤモンドの指輪を持つてゐる譯を白狀せなければ拷問に附するぞと嚇した。

そこで**イアキモ**は自分の惡事をすつかり告白した。前に話したやうに自分は**ポストユーマス**と賭をした事や、そして**ポストユーマス**をうまうまと欺いた事などを殘らず告白した。

ポストユーマスが自分の妻の無實である證據を聞いた時の心持は、言ひ現はす事が出來ない程であつた。**ポストユーマス**は直ちに前へ進み出て**シムベリン**に、自分が**ピサニオ**に命じて犯させた王女に對する慘酷な命令を告白した。そして狂はしげ

に叫びながら。「おゝ**イモヂン**、我が女王、我か生命、我か妻！おゝ**イモヂン**、**イモヂン**、**イモヂン**！」

イモヂンは愛する夫が自分の生きて居る事も知らず苦悶しておるのを見かねて、自分の身分を明し、罪と欺きの重荷より解き放して、**ポストユーマス**を非常に喜ばせこれまでに受けた慘酷な夫の仕打を許して昔の愛を夫に回復した。

シムベリンも失つた自分の娘が不思議にも見附かつたので、**ポストユーマス**に劣らず非常に喜び、前と同樣に父としての愛を以て勞はり、尙ほ夫の**ポストユーマス**の生命を許したばかりでなく、自分の養子として認めると言ふ許を與へた。

ベラリウスは此の喜びと仲直りの喜びの時機を見はからつて自分の罪を懺悔した**ベラリウス**は**ポリドア**と**カドウオル**とを王に示し。これが王の失つた**ギデリウス**と**アルビラガス**の二人の王子であると語つた。

シムベリンは**ベラリウス**老人を許した。王はそんな幸福な時に罰の事等を考へる

事が出來なかつたのである。娘が見附かり、又自分の爲にあんなに勇敢に戰つて呉れた青年が、自分の失つた王子であつたと言ふ事は誠に思ひ掛けない喜びに外ならなかつた。

イモヂンはやつとの事で外の仕事が終つたので、前主人、羅馬の將軍**ルシアス**の爲に命乞ひをした。王は立ち處に將軍の生命を許し、將軍**ルシアス**の仲裁に依つて羅馬と**ブリテン**との間に平和條約が結ばれて、平和は長い間保たれた。

然るに一方心の曲つた**シムベリン**の妃が、自分の密計が盡く破られたために絶望し、その上良心の呵責に耐へかねてゐた際、愚かな實子の**クローテン**が、自分から起した喧嘩で他人に殺されたと言ふ事を聞いたのが原因で、病氣になつて死んだと言ふ報知は、此の幸福に滿ちた大圓團を妨げるには少し悲慘すぎる出來事であつた。ただ幸福を受ける資格のある人は凡て幸福を受け、友を欺いた**イアキモ**でさへ、その惡事を遂行し得なかつたのだからと言ふお思召で、罰せられずに放還されたと言

ふ事はまことに目出度いことであつた。

リヤ王

ブリテン王、**リヤ**には三人の娘があつた。**アルバニー**公爵の妻である**ゴネリル**と**コオンウオール**公爵の妻、**リガン**とうら若い處女の**コオデリヤ**とである。**コオデリヤ**には**フランス**王と**バアガンディー**公爵との二人の戀の競爭者があつて、共に**リヤ**王の宮廷に滯在してゐた。

老王は年が老つたのと國事の心勞とで、今後國政には一切たづさはらず、王位は若い力のある者達に讓り、然も年は既に八十の坂を越してゐたので餘命もさう長くもあるまいと思はれる自分の死期を待つ事にした。そこで王は三人の娘を自分の所に呼んで、各々の娘の口から誰が一番自分を愛してゐるかを聞いて、その愛に相應する割合で自分の王國を三人に分けてやらうと決心した。

長女の**ゴネリル**は、口で言ひ得るより以上に父を愛し、自分の眼の光よりも、生命よりも、自由よりも、父を愛するなどと、本當の愛があつて言つて居るのではないと言ふ事がすぐ見えすく樣な、大げさな言葉で、父に自分の愛を示した。その言葉には本當の心から出た美くしさが少しもなかつた。併し王は娘の口から此の樣な愛の證を聞いて、ほんとうにその通りに思つてゐるのだらうと考へ、子の可愛さに眼が眩んで、その娘と夫とに廣大な領地の三分の一を與へた。

王は次に次女を呼んで、どれ程自分を愛するかと尋ねた。**リガン**も姉と同じ樣な僞りの心を持つてゐたので、姉に少しも負けない樣に言つた。否、**リガン**の父に對する愛の表現は姉のそれも及ばない程うまいものであつて、自分はありとあらゆる歡樂を斥けても、父王を愛するのを幸福に思ふと言つた。

リヤは自分が望んでゐた通りこんな可愛い子供を持つた事を非常に幸福に思ひ、**リガン**が美くしい愛の證を述べ立てたので、前に**ゴネリル**に與へたのと同じ程の大

きさ、卽ち王國の三分の一を彼女とその夫とに與へずには居られなかつた。

さて王は自分の祕藏子である、三番目の娘**コオデリヤ**に向つて、返事を求めた。王は勿論この娘が姉達が言つたと同じ樣な可愛いゝ言葉で自分の耳を喜ばせて呉れるか、それとも常に姉達よりも、より可愛がつて居るのだし、姉達よりも常に親切を盡して呉れる娘の事だから、姉達よりももつと强く父王への愛を表はすだらうと思つて居たのである。併し**コオデリヤ**は心にも無い事を口に述べ立てた姉達の諂を惡んでゐたのと、姉達が父の機嫌を取るのも唯父の領地を欺し取つて、自分の夫達と共に王の存命中にもその國を治めやうと思つてやつてゐるに過ぎない事を知つてゐたので、斯う答へるより外はなかつた。——私は義務相應に父を愛します。それより多くもなければ、又少なくもありません。

王は一番自分の寵愛して居る娘が、こんな恩知らずの樣な答をしたのに驚いて、良く考へなほして言ひ方を繕はぬと幸福を得られないと注意した。

コオデリヤは自分を育て、可愛がつてもらつた父であるから、そのお禮には、子として正當な義務丈は盡し命令に從ひ愛しもし又敬ひもするが、姉達が言つた樣に大げさな事はどうしても言ふ事が出來ないし、又世界中何物にも勝つて愛すると云ふ樣な事はどうしても約束する事が出來なかつた。若し姉達が言つた樣に姉達が父の外に何者をも愛さないのならば何故夫と結婚したのだらう。結婚した上はその夫に對し自分の愛の半分は捧げなければならぬ。また、心からの心盡しと勤めをも半分は夫のために捧げねばならぬ。若し姉が父のみを愛するのならば結婚すべきではなかつた筈だ。と父に言つた。

姉達が言葉の上で父を愛してをつたのに引き換へ、**コオデリヤ**は心から父を愛してをつたのであるから、もし外の時であつたならば、もつと娘らしい可愛いことで少しも言葉を飾ることなしに、そして少しも不孝者とも思はれずに父に自分の愛を納得させる事が出來たであらうが、姉達があの樣に巧みに機嫌を取る樣な言葉を言

つて、法外な報酬をもらつたあとであつたので、心で愛して默つてゐるのが最も立派なやり方だと考へた。だから**コオデリヤ**の愛情は損得にかかはらぬものである事が分り。又父を愛してゐるのは領地が欲しいからではない事を示した。しかも**コオデリヤ**の言葉こそ一番見得を張つてはゐなかつたが、二人のよりは本當であり眞實であつた。

此の樣に明ら樣に言つた**コオデリヤ**の言葉を、**リヤ**王は高慢だと言て非常に怒つた。——此の老王は若い時分には短氣な性質で癇癪を起したり激怒したりしたが、老年の今は王の理性は年寄りに有り勝ちな溺愛の爲に曇らされてゐたので、諂と眞實との見別けが附かず、大げさに飾り立てた言葉と心からの親切との區別が出來なかつた。——そして怒りのため物の見さかひが附かず、**コオデリヤ**にやらうと思つて殘して置いた國土の殘りの三分の一を取つて、それを平等に二分して姉達とその夫である**アルバニー**公爵と**コオンウオール**公爵とに與へた。そして二人の公爵を呼び

寄せ朝臣達の居並ぶ前で二人の連帶に自分の王冠を讓り、凡ての權力も、所得も、司配權も共同所有として二人に與へ、自分は唯王と言ふ名稱を保つ事を宣言し、其他の王の待遇は凡て放棄し、唯百人の侍臣達と共に、毎月交代に二人の娘の宮殿で養つてもらへば良いと言つた。

王が理性を失つて、激情のまゝに、自分の王國を不合理に處理した事に對して、朝臣達は非常に愕き又悲しんだ。併し誰も激怒した王を諫める丈の勇氣のあるものはなく、唯一人**ケント**伯爵のみが**コオデリヤ**の爲に辯護しやうとした。けれども激怒した王は直ちにその話を止めなければ殺してしまふときさへに怒つたが、正しい**ケント**伯爵は之をやめやうとしなかつた。伯爵は今迄常に**リヤ**王に對して忠義を盡し、王として尊敬し、父のやうに愛し、主人として命に服してゐたのみならず、伯爵は常に自分の生命を王の敵に賭けた質物の樣にしか考へてゐず、王の安全の爲めとならば自分の命を捨てる事さへ少しも怖れてゐなかつた。王が今は自分を惡んでゐる

けれども、本來の主義を忘れずに男らしくも王のためを思つて**リヤ**王に諫言をしたのである。之を無禮だと怒つたのは**リヤ**王の氣が其時轉倒してゐたからだ。伯爵は今迄長い間最も忠實な王の顧問官であつたので今も尙（これ迄の重大事件に就てした樣に）親しく意見を述べて王に諫言しやうと思ひ、熟考した上王の末娘が姉達に劣らず父を愛してゐる事、又華やかな言葉で、言はないで、普通の言葉で言つたのは少しも僞りのない證であると言ふ自分の判斷が間違つてをれば、自分の命を投げ出してもよいと言ふ斷乎たる決心をしたのであつた。すべて權力が諂に盲いられた時には臣下の諫言も露骨とならざるを得ない。伯爵の命は既に王に捧げてあるのであるから王の嚇しも何の役にも立たなかつた。伯爵は忠臣としての義務を感じてしたのであるからその位の事では引き込まなかつた。

ケント伯爵が王の爲を思つた諫言も唯王を益々怒らせたばかりであつた。そして精神病者が自分の致命的病氣を好んでその醫者を殺すやうに、王はこの忠實な臣下

に追放を命じ、出發準備として五日間の餘裕しか與へなかつたのみか、若し六日目になるも、伯爵が未だ**ブリテン**の領内の何處かに居るならば、直ちに殺して了ふとまで嚴達した。**ケント**伯は王に別れを告げて言つた。無禮をも省みず斯く言つたからには、此處に殘つて居たとて、追放の身と同じ事である。又出發する前にあの樣に正しく考へ、分別ある言葉を言つた、**コオデリヤ**姫の上に神々の加護を祈り、姉姫達の大げさな言葉よりも行爲の上に愛を示されたいと望み、新らしい國へ行つて以前通りの主義を守らうと言つて出發した。

フランス王と**バアガンデイー**公爵とは、王の前に招かれて、王から末娘に對する決心を聞き、今や父の怒りを蒙つて、身體一つの外に何の財産もなくなつた、**コオデリヤ**を尙妻に欲しいと願ふか何うかを尋ねられた。**バアガンデイー**公爵は求婚を思ひ止つてそんな條件の下になら妻に貰ふまいと言つたが、**フランス**王は姫が父の愛を失つた原因が何んな性質の過失であつたかと言ふ事、姫の言葉が緩慢で姉達の樣

に諂(つ)を言ふ事が出來なかつたが爲である事などを知つてゐたので、喜んで姫の手をとり、姫の德は一國よりも尙尊い持參金であると言つた。そして直ちに**コオデリヤ**に向ひ、姉達や殘酷であつた父に對して別れを告げ、自分と共に**フランス**へ行き妃となり、美しい女王となつて、姉達のよりもずつと美くしい領土を治めて呉れと願つた、そして**バアガンデイー**公爵の愛が此の時凡て水の樣に流れ去つたので、水くさい公爵だと嘲弄した。

コオデリヤは涙を流して姉達に別れを告げ、好く父上を愛し好く國を治めて呉れる樣に願ひ、姉たちは二人とも自分等の義務位は心得てゐるから、その指揮には及びませぬ、却つて好運のお餘り程に思つてお前を拾つて呉れた（二人はそんな言葉で嘲笑した）良人の機嫌を損ねない樣にしろと言つた。**コオデリヤ**は姉達の善くない心をも知つてゐたし、父上をこんな姉達の手に殘して置くに忍びず、重い心を抱いて宮殿を去つた。

コオデリヤが立つか立たないかに姉達の惡心はその本性を現はした。**リヤ**が長女**ゴネリル**のもとに一緒に暮した最初の一ヶ月が未だ終らない前に、王は既に約束と實行との間に非常に相違のある事に氣が附いた。此の心の曲つた姉は父から得られる丈のものは悉くとり、王から王冠をさへ奪ひ取つてゐたが、王が尙ほ自分は王であると思つて滿足する爲に殘して置いた王權をもとらうとして不平をこぼした。娘は父やその百人の侍臣共が居るのが嫌であり、父に會ふ度毎に澁面を作つた。父が娘に話し掛けやうと思つた時にはいつも似せ病氣になつたり、父の傍から脫れる樣な口實を作つた。娘は今、父の老年を厄介物に思ひ、侍臣等を無用な費えだと思つてゐた事は明かであつた。娘は自分で王に對する義務を怠つたのみで、別に訓令はせなかつたのであらうが、その臣下共までも娘に見ならつて王を疎略に取扱ひ王の命令に從はなかつたばかりか、輕蔑して王の言ふ事さへ聞かない樣な振をした。王は、自分の過失や我儘から自分の身に降り掛つて來た不快な結果に對しては、誰も

そう思ひたく無いと同じ樣に、出來る限りは自分の娘の態度が變つた事をも、見て見ぬ振をしてゐた。

似非者や不實の者が、たとへどんな厚遇を受けてもその心を換へないと同じ樣に本當の愛情や眞實のある者は如何に虐待されるともその志を變へるものでない。その好例は**ケント伯**である。伯爵は王から追放を受け、期限の後一日たりとも英國に留まつてゐたならば、命を取られる事になつてゐたが、主君の爲に忠義を盡す機會の有る限りは、止まつて如何なる困難にも耐へやうと決心し、時々は賤しい手段を巡し姿を變へてまで忠義を盡さねばならなかつた。然しながら之も責任ある自分が王の爲に何程かでも役に立てばと思つてした事であるから、絕對に恥づ可き無用の事ではなかつた。伯爵は凡ての威嚴と光榮とを捨てゝ、王の爲に力とならんものと給仕の變裝をして居たが、王は伯爵が變裝してゐるとは知らず（王は既に娘達の油の樣な滑かな諂の言葉が約束通りに行はれなかつたのを知つて、それに懲りてゐた

所であつたので）伯爵の露骨な、或は寧ろ無禮とも言ふ可き應答振りを非常に喜び
そこですぐに話が調つて、その男の言ふ**ケーアス**と言ふ名前のまゝで王の召使となる事になつたが、これが王の昔の寵臣であつて、氣高くも威嚴を備へた**ケント**伯爵であるとは少しも氣附かなかつた。

ケーアスは召抱へられて間も無く王に對して愛と忠義とを示すべき機會を得た。その女主人から内々に命ぜられてゐた事は確かであるが、其日**ゴネリル**の執事が**リヤ**に對して無禮な言動をなした。**ケーアス**はその時王に對して斯樣に明ら樣に無禮な言行をなすのを、見るに見かね矢庭に足を上げて無道な執事を小溝の中へ蹴り込んだ。この友情に厚い勇敢な行動を見た**リヤ**は、**ケーアス**を益々深く信頼する樣になつた。

もとより王に侍つてゐた周圍の忠臣は、**ケント**丈ではなかつた。當時王侯貴族は道化者を抱えて置き、煩い事件の起つた後にはいつも人々を笑はせる爲めに使つてゐたので、**リヤ**がまだ宮殿を持つてゐた時に抱へて居た道化者が、出來る限り何氣ない風を裝ひ、王に對して敬愛を示して居り、**リヤ**王が王位を與へてしまつた後も、頓智で王の氣持を愉快にさせてゐた。さるにても時には王が自ら王冠を捨て、一切の所有物をさへ娘達にやつてしまつた事の無謀を嘲笑せずには居られなかつたので時時節面白く歌ひ出したものである。

其の時娘御は嬉し泣き
おれは悲しうて唄うとた
こんな王樣が阿呆を相手に
かくれん坊をさつしやるかと思うて。

こんな風に澤山知つてゐた露骨な洒落や歌等を歌つてこの正直で愉快そうな道化者は、**ゴネリル**の面前をも憚らずに、手嚴しい嘲弄や、急所を刺す皮肉等を言つた例へば王を、杜鵑の卵を孵化する桓雀に譬へ大きくなつてから育てた雛のために傷

けられる樣になる事を言つたり、何んな馬鹿だつて、車を引く時に馬が車の後からついて行つたら、不思議に思はないものはあるまいなどと言つた。(それは父の後に從ふべきリヤの娘達が父の前に位してゐる事を諷したのである)その上、今のリヤ王は王ではなくて唯その陰影に過ぎない等と言つた。その無禮な嘲笑の爲めに、笞で打つぞと嚇された事も一度や二度ではなかつた。

リヤ王が受け始めた冷酷や無禮な行爲は、この無情な娘がお人好しの父親に對してなした、斯んな事だけでは濟まなかつた。娘は父に向つて明らかに百人の侍臣を連れてをることを主張されるなら自分の宮殿にゐて貰ふと迷惑する事、又あの侍臣等を置くのは無用の長物で只金が入る一方で放埒や遊宴を行はせる以外に取り柄はないのだから、今後は、父の樣な年寄相手になる者ばかりを殘して、その數を減じて貰ひたいと要求した。

リヤは始め自分の耳や眼を信ずる事が出來ず、又そんな不人情な事を言ふのが、

自分の本當の娘だとも信ぜられなかつた。自分の手から王冠をとつておきながら、父の侍臣の數を減じ、老人に對する相當の待遇をさへ吝む事を本當にする事は出來なかつたが、娘は飽く迄も不人情を言ひ張つたので、王は怒りの餘り娘を忌はしき鳶と罵り、娘の嘘言を責めた。王がさう言つたのも無理のない事である。王の從へてゐた百人の騎士達は皆選り拔きの品行正しく態度の嚴格な人々であつて、その職務に忠實であつた人達ばかりであつたから、娘が言つた樣に決して放埒や遊宴に耽ける樣な事はなかつた。そこで王は自分の馬の用意をさせ、百人の騎士と共に他の娘リガンの所へ行かうと思ひ立ち、娘の忘恩を責め、石の如き心を有する魔女だの、海に住む怪物よりも怖ろしい心の娘だのと罵り、その上聞くも怖ろしい呪の言葉を以て、娘ゴネリルが一生涯子を生まぬ樣に、若し生まば娘が自分に對してなした輕蔑と悔辱との報ひとして、同じ樣にその子がゴネリルに輕蔑と悔辱とを與へるやうに、そして娘が不孝者の子を持つ事が毒蛇の齒よりも怖ろしいものであることを身

に染みて悟る樣にと祈つた。**ゴネリル**の夫、**アルバニー**公爵は王が受けた不親切な待遇には自分も責任があると考へられるかも知れないが、自分は一切關係してゐないと辯解したが、王は少しもそんな事には耳を藉さず、怒つて馬に鞍を置けと命じ從者をつれて他の娘**リガン**の宮殿へと急いだ。そして王は、**コオデリヤ**の過失（若し過失と言ひ得るならば）が姉のと比べて如何にも少なかつた事を考へて泣いた。**又ゴネリル**の如き蓄生にも等しき女に、自分の樣な大の男を泣かしむる程の權力を與へた事を心より恥ぢた。

リガン夫妻は威勢と華美とを極めてその宮殿に暮してゐた。**リヤ**は召使、**ケイアス**に、やがて後から行く王とその從者等を迎へる用意をせよと言ふ、娘への手紙を持たして先に遣はした、一方、**ゴネリル**も前以て**リガン**に使臣を送り、父の氣儘と不氣嫌とを告げ、父が從へて行く從者達を入れるのを斷つてしまへと忠告した。この使者は**ケイアス**と同時に到着して不意に出會つた。然もその使者こそ、以前王に

對して無禮を働いた爲めに**ケイアス**に蹴り飛ばされた、あの仇敵の執事であつた。**ケイアス**は此の男の顏が蟲が好かぬので、何故に此處へ來たかを疑ひその男を罵り決鬪を挑んだが執事はこれを斷つたので、**ケイアス**は本氣に怒つて、惡事を働き邪な報知を持つて來る樣な者に相應する程、したゝかその男を毆り附けた。**ケイアス**は**リガン**夫妻から父王の使者であつた性質上、厚遇を受けるべき筈であつたが、この事が耳に這入つたので**ケイアス**は足枷の刑に處せられる事となつた。だから王が宮殿に入つた時、先づ王の眼に映つたものは、その恥づべき狀態にゐた忠僕**ケイアス**の姿であつた。

此の事は王が期待してゐたことを裏斬つて待遇の惡い前兆であつたがそればかりか、まだまだ惡い事が相尋いて起つた。王が娘夫婦に對面したいと言つた時に、夫婦は夜通し旅行した疲れの爲に今晩は對面が出來ないと斷つた。然し王が怒つて飽迄も對面したいと言つたのでしぶしぶ父を迎へる爲に出て來た者に事を缺いで、其

所にはあの憎む可きゴネリルも一緒に出て來たのである。そして自分の事をのみ都合よく言ひつくろひ、妹にまで父を憎ませやうとした。

此の事件だけで、老王を怒らせるには充分であつたのに老王は更にリガンがゴネリルの手を執つておるのを見た。老王はゴネリルにこの老人の白鬚を見るのを恥かしいとは思はぬかと尋ねた。そうするとリガンは父に向ひ、あなたはもはや年寄つて分別も無くなり、自分よりも若く思慮ある人の支配と指導を必要とするのだから、も一度ゴネリルと一緒に姉の宮殿に歸り、侍臣を半ばに減じて、姉の許しを乞ひ平和に暮す樣にと勸めた。リヤは自分の膝を折つて、自分の娘に衣食を乞ふと言ふ事が如何にも不道理に響くので、そんな不自然な世話はされ度くないと頑張つて、ゴネリルと一緒には絶對に歸らないと斷言し、此處に自分と百人の騎士とが泊る決心だと言ひ、リガンはよもや自分が王國の半分を與へた恩は忘れては居るまいし、又リガンの眼は姉の程鋭い所がなく優しくて親切さうだからと言つた。そして王は自

分が侍臣を半分にしてゴネリルの所へ歸る位ならば、むしろフランスへ渡つて何一つ與へなかつた娘と結婚したフランス王に少しばかりの給與を乞はうとさへ言つた。

王が姉娘ゴネリルの所で受けたより親切な待遇をリガンの所で受けようと期待してゐたのは間違であつた。リガンは不孝競べに姉に負けてはならぬと思ふかの樣に父に向つて五十人も侍臣を從へてゐるのは多過ぎる、二十五人で充分だと言つた。そこでリヤは殆んど心も張り裂んばかりになり、ゴネリルの許す五十人の方が二十五人の倍であるから、その愛情もリガンの倍だらうと思つて、ゴネリルの方を向き一緒に歸らうと言つたがゴネリルは又口實を設け、自分達の召使ひに用を足して貰へばいゝのだから、二十五人は愚か、十人でも、五人でも多過ぎるとさへ言つた。そして心の曲つた姉妹達は深い恩愛を受けた老年の父に對して、慘酷な態度を競ふてゐるかの樣に、父が一度は王であつたと言ふ名殘を示す爲に留めて置いた（到底王者としては充分でない）侍臣や尊嚴をさへも、段々と數を減じ果ては何一つ殘す

まいとさへした。華美な從者と言ふものが人間の幸福に無くて叶はぬものではないが、王であつた身が乞食となり、數萬の軍人を指揮した者が、唯一人の從者さへ無い身となるとは實にみじめな變り方である。まして眞實の娘が恩を忘れて父を捨てた事を思ふては、從者を失つた苦しさよりも勝つて、この哀れなる王の心を打碎いたのである。王は、二人の娘達の無道な行ひと、愚かにも斯んな娘達に王國を分ち與へた後悔との念とで、心は動搖し、夢中になり、無道な惡女共に仇を返し、世の娘達の後世の見せしめにしやうとまで呪つた。

王が自分の老いた腕では到底できそうもない、嚇し文句を言つてゐる最中に、夜はせまつて、その上電光雷鳴の怖ろしい暴風雨となつた。姉妹達は尙も侍臣を從へる事を許さうとせないので、王は此の樣な恩知らずの娘達と一つ屋根の下に居るよりは、外の嵐の猛り狂ふ中にゐる方がましだと思つて馬を命じた。姉妹達は我と我が身に苦痛を求める人には、いゝ懲しめになるだらうと言ひ、王をその嵐の中に追ひ

出して戸を閉めてしまつた。

風は益々猛り狂ひ、雨は益々加はつた。王は是等の風雨電雷と戰はねばならなかつたが、無情な姉妹達に比すれば却つて樂な位であつた。行けども行けども樹立の影さへ無い荒原の中に、暗夜のしかも嵐の狂ふ中を、王は彷徨ひ歩いた。そして暴風と雷雨とに逆ひつゝ、王は醜き人間の跡かたをも無くするため、風には地を吹き飛ばして海に沈め、海の波には天地を呑み盡さむことを願つた。今は王の傍を離れず、不幸の内にも滑稽を以て王を笑はせ慰めやうとする道化者の外には唯一人の從者さへ無かつた。この道化者は、今晩雨を凌いで歩くには骨が折れる故、いつそ娘の所へ歸つて憐みを乞ふた方が宜しからうと王にすゝめて、歌つた

小ちやい〳〵智慧しか無い身は
あゝ疲れた、大雨風だ！
運に氣嫌を任かさにやならぬ、

雨が毎日降らうとも雨が。

そして今晩の樣な夜こそ婦人達の高慢を冷やすのには持つて來いの晩であると言つた。

一度は王であつたリヤも今は道化者一人をつれてみじめな樣にて忠實な從者、ケイアスに身をやつしてゐるケント伯爵に廻り合つた。王はケント伯とは少しも氣附かなかつたが、伯は常に王の側を離れやうとはせなかつたのである。

「まあ、陛下こゝにおいでなさいましたか。夜を好む動物でもこんな晩は好みませぬ。此の嵐に恐れて獸共さへ洞穴から出掛けませぬ。人間の身ではとてもかういふ苦しみや恐れには堪へられませぬ」。と言ふと王は遮つて答へた。大きな苦しみがあると他の小さい苦しみは感じないものだ。心が平和な時には身體はデリケートになる。心に大なる惱みがあるとそれのみが心を苦しめるものだ。それから娘の忘恩を責めて、丁度口が食物を運んでくれた手を引き裂いてしまふ樣なものだ。子供に

とつて兩親は手であり食物であり凡てゞあるのだから。

然し善良なケイアスは、王を風雨の中にさらして置く事を欲せず、熱心に王を說いて、荒野に立つてゐた小さな怪しげな小舍に入れた。そこへ道化者が最先に這入つたが、幽靈がゐたと言つて怖れて逃げ出して來た。が善くしらべて見るとこれは風雨をさけて小舍にもぐり込んでゐたベトラムの乞食に過ぎない事が判つた。それはその男が化物のまねで道化者を嚇かしたのであつた。此の乞食は本當の氣狂か、それとも同情ある田舍人の憐みを惹く爲に氣狂の眞似をしてゐるものか、自分で憐れなトムだとか哀れなターリゲッドなどと稱し、「哀れなトムに何か下され」と言ひながら田舍を廻り、自分の腕に針や釘又は迷迭香（きんねんこう）の刺等を刺して血を流しその怖ろしい動作と共に祈つたり、又呪文を唱へたりなどして、正直な田舍人の心を動かし又は嚇かして施し物を與へさせる連中の一人であつた。王は裸體をかくすために腰に一枚の毛布を纏ふた、このみじめな姿を見て、この男をも亦自分と同じ樣に娘に

財産をすつかり讓つたためにこんな淺間しい姿になり果てた者だと考へた。王は不親切な娘を持つた者でなければ、誰だつてこんな見る影もない有樣になるものでないと思つたからである。

然るに王もいろ〳〵と亂暴なことを言ひ出したので、**ケイアス**は明かに王は娘達の酷い取扱ひの爲に氣が狂つたのだと推察した。**ケイアス**は折さへあれば忠義を盡さうと思つて居たが今や、これまでにない好機を得て王の爲に非常な役目をつとめた。**ケイアス**は王の侍臣中の忠臣達の助けを藉り、夜明け頃に、自分の友達や**ケント**伯と同樣に忠義の士の住む**オバア**城に王を移し、親らは**フランス**に向つて出帆し**コオデリヤ**の宮殿に赴き、そこで感動させる樣な言葉で父王の哀れな狀態を說き、姉達の極惡非道な振舞を手に取るやうに物語つたので、孝心深く優しい**コオデリヤ**は涙を流しながら夫王に願ひ、この殘酷な姉や姉婿達を擊ち亡ぼし、父王に今一度王位を取戻す爲、充分な軍隊を連れて英國に渡らして呉れと乞ひ、その許を得、**コオ**

デリヤは間もなく大軍を引きつれて**ドオバア**に上陸した。

どうしたはづみか**リヤ**王は、**ケント**伯爵が氣が變だからと思つて附けて置いた番人の眼を盜んで逃げ出し全く氣狂になつて、藁や蕁麻（いらくさ）や麥畑で摘んだ雜草等で作つた冠をかぶり、怪しげな歌を歌ひながら見るも憐れな姿にて、**ドオバア**附近の野原を彷徨ふてゐるのを**コオデリヤ**の侍臣が見附け出した。**コオデリヤ**は早く父に會ひ度いと心ではたまらなく思つてゐたが、醫者の注意により、しばらくの安眠を與へ且つ醫者のすゝめた藥草の効果で父が安靜になるまで面會を延ばすことゝした。若し父の病氣が癒つたならば、自分の持つてゐる金銀寶玉のあり丈を與へやうと**コオデリヤ**が約束した、醫者の秀でた療法に依つて、**リヤ**は間もなく病が癒えて娘と對面する迄になつた。

親子の對面の有樣は何と美くしい光景であつたらう　王は嘗つて限りなく愛してゐた娘を再び此所に見ることの出來た喜びと自分が怒りの餘り、僅ばかりの罪のた

めに勘當した人から、こんな親切を受ける事を恥ぢる心とで胸が一ぱいになつてゐた。その感情の葛藤と未だ充分に治つて居ない病氣も手傳つて、自分が今何所にゐるのか、自分に斯くも優しく接吻して、話をする人が誰であるかさへ忘れた程であり、又側に居る人達に、若し自分がこの婦人を**コオデリヤ**だゞ思つてゐるのが間違つてゐても笑ふて呉れるなどと言つて、我が子の前に膝を曲げて許しを乞ふた。娘も其の間同樣に膝を折つて父の祝福を祈り父が娘の前に跪くのは勿體ない事であるが、自分が跪くのは子としての義務であり、自分こそ本當の**コオデリヤ**であると語り、姉達の不孝を吸ひ消して上げやうと言つて父に接吻した。そして例へ自分に咬み附いた敵の犬でさへ、そんな晩には家の中に入れてやり、暖めてやる程なのに、まことの父、しかも年寄つて白髮になつてゐる、親をそんな寒い晩に放り出した姉二人は、自分自身を恥かしいとは思つてないのだらうかと言ひ、父を助ける目的で**フランス**から來た譯を話した。そこで王は自分は耄碌して、何をしたのかさへ判らな

いのだから、以前の事は忘れて許してくれる樣にと願ひ、自分に對して責任を持つ姉達が情なくするのに引きかへ、何の責任もないお前に恩を受けることは有難いことだと言ふと、**コオデリヤ**は姉と同じ程自分にも責任がありますと答へた。

安眠と藥草との効果で、冷酷な姉妹のために心を攪き亂され調子を狂はしてゐた王の感覺も元通りに回復することが出來た。さて我々はこの老王を、安心して孝行な娘の保護の下に置いて、あの無道な姉妹に就て二三の事件を語らう。

自分の年老いた父にさへあんなに無道であつた二人の忘恩の魔女達が、何うして夫に對して忠實であると保證し得やう。二人は間もなく夫に對しても表面上、義務や愛情を示す事さへ倦いて、自分達が他の男に愛を捧げてゐる事を明らさまに示すやうになつた。二人の惡むべき戀の相手が同一人であつたのも因果である。

エドモンドは故**グロースタア**伯爵の子であつたが陰謀を企てゝ嫡兄、**エドガア**の地位を奪ひ取り今や、伯爵となつてゐる惡人で、**ゴネリル**や**リガン**の樣な人非人に

は好い戀の相手であつた。丁度この時**リガン**の夫、**コオンウオール**公爵が死んだので**リガン**は直ぐ樣**グロースタア**伯爵に結婚の意志を示した。然るに姉は此事を知り自分とも深い戀を契つた伯爵に對する嫉妬の情を燃やし、**ゴネリル**は妹を毒殺しやうと企てた。然るに、此の惡計が露見したのと、**ゴネリル**が伯爵と不義してをるのが公爵の耳に入つて、夫**アルバニー**公は**ゴネリル**を獄屋に投じた。其處で**ゴネリル**は戀の破滅と怒りのために自刄した。斯くして天の刑罰は二人の無道の娘の上に下された。

此の事件の上に注がれてゐた人々の眼は、姉妹の身にその罪にふさはしい死を見て、天の審判に驚嘆したが、只その身の善行に依つてもつと幸福な最後を遂げるだらうと思はれてゐた、若くて德の高い**コオデリヤ**姫の悲慘な運命を見ては、天の不思議な力を驚かざるを得なかつた。然し恐ろしい事實は純潔と敬虔とはこの世の中では必ずしも成功しないと言ふ事であつた。**ゴネリル**と**リガン**とが**グロースター**伯

爵の指揮の下に送つた軍勢が終に勝利を得て、王位に即く妨碍となる者は一切無い樣にしやうと思つてゐた、伯爵の惡計によつて、**コオデリヤ**を捕へて獄中で殺した斯く天は孝女の手本として世に示した後、未だ若い娘の身である純潔な少女を天國に拉し去つた。**リヤ**も娘の死後長くは生きてゐなかつた。

王が死ぬ前に、姉妹から虐待を受けた最初から、この哀れな最後を遂げるまで王に從ひ、忠實に仕へてゐた**ケント**伯爵は、自分が**ケイアス**と言ふ名前で從つて來てゐたのである事を王に知らせやうと努めたが、狂つた王の頭にはそれが一體、何うした譯なのか判斷する事が出來ず、何故に**ケント**伯と**ケイアス**とが同じ人なのかが分らなかつた。で伯爵も今こんな時にくどくしく說いた所で無用だと思ひ止まり此の王の忠臣もよる年波と王の薄幸とを悲しんで間もなく王のあとを追て墓場へ行つた。

やがて天の審判が**グロースタア**伯爵の上にも下つた。陰謀が露見し嫡兒と決鬪して殺された。然るに**ゴネリル**の夫であつた**アルバニー**公爵が、**コオデリヤ**の死にも

無關係であり、**リヤ**王を虐待せよとて殊に妻をそそのかしもせなかつたのであるが何故に王の死後**ブリテン**の王位を繼いだかと言ふ事は今告げる必要はあるまい。この物語の主眼である**リヤ**王とその三人の娘達はもう死んでしまつてゐるから。

マクベス

ダンカン温和王が**スコツトランド**を治めてゐた時、**マクベス**と呼ぶ偉い貴族が住んでゐた。此の**マクベス**は王の親類であり、宮廷に於てもその勇氣と戰功とに依つて非常に重んぜられてゐた。その一例を擧げると最近彼は雲霞の樣な**ノールウエイ**の大軍に後援されてゐる賊軍を打滅ぼした事がある。

スコツトランドの二將軍**マクベス**と**バンクォー**とが、その大戰に勝つて歸る途中、荒れ果てた野原を通つてゐると、其處へ不意に女の樣ではあるが鬚をはやした、皺の寄つた顏や奇妙な服等は全く此の世の物とも思はれない樣な三人の怪物が現はれて將軍達の行方を遮つた。その怪物達が怒つた樣な樣子をして、皆默れと言ふ樣に皺だらけの唇へがさ〳〵の指を當てゝ立つてゐた時、**マクベス**が最初に呼び掛けた第一の怪物は**マクベス**を**グラーミス**の貴族といふ敬稱を言つて挨拶した。將軍はそんな怪物が自分の名を知つてゐるのを少しも驚かなかつたが次いで第二の怪物が**コオドア**の貴族といふ稱號を以て呼んだ時、自分はその稱號を要求する權利さへ持つてはゐなかつたので、も一層驚いた。そして第三の怪物は「未來の國王萬歲」と言つた。此の樣な豫言的な挨拶は、王子達が生きてゐる限りは自分が王位につく望さへ無い事を良く知つてゐた**マクベス**を非常に愕かせ又怪物共は**バンクォー**の方に向き直つて謎の樣な言葉で、**バンクォー**は現在**マクベス**より偉大ではないが將來はずつと偉大になるであらう！今日では**マクベス**程幸福ではないが將來はずつと幸福になるだらう！親らは王となる事はあるまいがその子孫達は**スコツトランド**の王となると豫言した。そして彼等は空中に消え去つた。兩將軍はさてこそこれが妖婆か巫婦

の類だなと悟つたのである。

二人が此の奇怪な出來事にしばらく思案して立つてゐた時、王よりの使者が駈けて來て、**マクベス**に**コオドア**の貴族の尊號を授くると言ふ王の命令を傳へた。事實が不思議にも妖婆達の豫言と一致したので**マクベス**は驚いた。その驚愕のため呆然と立つた儘、その使者に返す言葉さへ出なかつた。此の時以來**マクベス**の心中には第三の妖婆の豫言が又今と同じ樣に成就して、何日か**スコツトランド**の王位に卽く時が來るだらうと言ふ强い野心がむら〳〵と起つたのである。

マクベスは**バンクォー**の方を向いて言つた。「君は、子供たちが、行く〳〵王になるだらうと思ひませんか、あの妖婆達が僕に言つた事が全くよく當りましたから。」**バンクォー**は答へた。「そんな希望を持つてゐなさると、つい王冠までも欲しくなりませうぜ。然し、どうかすると、惡魔が、人間を邪道に誘はうとして、わざと一寸した事に驗を見せておいて、重大な事件でおとしいれる事がある。」

欠人

りに人情深き性質であることを怖れてゐた。夫人は夫が野心家であるにも拘らず、小心であるため野心家が、常に忍んで冒さねばならぬ大罪を遂行する程の勇氣のない事を知つてゐた。夫人は一度は彼を說き附けて、暗殺を決心させたものゝ、その決心に疑を挾んだ。そして夫の天性は（夫人の性質よりもずつと人情深かゝつたので）この決心を鈍らし、よく目的を果さないかも知れないと心配したので、自分の手に懷劍を握り王の寢臺に近づいた。寢室に侍る二人の侍臣には、前以て酒をうんと呑ましてあつたので、彼等は醉ひつぶれ自分の義務も何も忘れて眠つてをり、**ダンカン**王は旅の疲でぐつすりと寢込んでゐた。然し夫人がその寢顏を熱心に見た時王の顏が何所となく自分の父に似てゐる所のあるのに氣が附いて、何うしても劍を擬することが出來なかつた。

夫人は夫と相談するために戻つて來た。**マクベス**の決心は鈍つてゐた。彼の心の中に此の蠻行に逆ふ強い理性が動いてゐた。第一に**マクベス**は王の重臣であるのみ

欠

ならず、王の近親であり、しかも其日は王を招待した主人で、客に對する禮義より言つても戸を閉して、人殺し等の入るのを妨ぐ義務がありながら、自分で劍を取る等とは以ての外の事で、それから又、このダンカン王が如何に慈悲深くあつたか、如何に臣下に對して寛大であつたか、如何に貴族—特にマクベス自身を、愛したかを考へ、斯る王にはきつと天の特別の加護があるだらうし、又臣下も必ず復讐をするだらうと考へた。その上マクベスは、王の御蔭で凡ての人々から尊ばれてゐるのに暗殺者の譏りを以て此の名譽を汚されるに忍びなかつた。

マクベス夫人は夫がこんなに心の内に苦惱してゐるのを見て、後悔の念にかられ陰謀を斷念しやうとしてゐることを知つたが、いさゝかの事で此の惡計を捨てる樣な女でなかつたので、自分の極惡な精神を夫の心に注ぎ込まうとして夫に色々と說き始め、一旦計畫した事を中止してはならぬし、こんな事位は易々と行はれ簡單に濟んでしまふから、短かい一晩の働を怖れて、後々長く王位に即く幸福と榮華とを

取逃してはならぬと理詰めにして夫を說きつけ、しかも夫の心變りしたことを輕蔑し、浮薄であり、憶病であると罵り、自分は乳を飲ました事があつて、乳飲兒の可愛らしい事も知つてゐる、然し夫が王を暗殺しやうと約束したやうに自分が殺さうと約束したなら自分は顏には笑をたゝえながら、愛兒を自分の胸から引き離し、それを投げつけてその腦味噌をも出して見せると言ひ、その上暗殺の罪は醉つて眠つてゐる侍臣に着せる事が出來ると智慧づけた。夫人が斯くも毒舌を以て鈍らうとする夫の決心を喚び起し、果てはマクベスの勇氣を再び振ひ起して血醒い仕事をしやうと決心させた。

マクベスはそこで手に懷劍を握り、暗の中をダンカンの寢室へと忍び寄つたが、歩いて行く時に眼の前に、自分の方へ柄を向けた、尖先よりも、又からも血の滴つた他の劍が現はれた。手を延ばしてそれを握らうとすると空に消えて終つた。之は暗殺の事を思ひ詰めて頭が混亂して居たので、マクベス親らが描き出した幻影に過

ぎなかつたのである。

此の驚怖をも振り捨て、王の寢室に入り、只一討ちで王を殺してしまつた。彼が漸く暗殺の目的を達した時、同じ室に寢てゐた侍臣の一人が夢中で笑ひ出し、今一人の者が「人殺し」と叫んだので。二人共眠を覺し、共に短かい祈りをした後、一人が「神樣お助け下さい」と言ふと他の一人が「アーメン」と言つて二人共再び眠つてしまつた。**マクベス**は側に立つて聞いてゐたので、一人が「神樣お助け下さい」と言つた時に「アーメン」と言はうとしたが、自分も最初の助けの祈を願つて居たのであるが、言葉が咽喉に支へて遂に言ふ事が出來なかつた。

その時である、**マクベス**は又何所からともなく叫ぶ聲を聞いた。「もう安眠は出來ないぞ。**マクベス**は安眠を殺してしまつた。生命を養ふ無邪氣な安眠を」。續いてその聲は家中に響き渡つた。「もう安眠は出來ぬぞ。**グラミス**が安眠を殺してしまつただからもう**コオドア**も安眠ることは出來ない。**マクベス**も最早安眠る事は、出來ない」

マクベスは斯かる怖ろしい幻影に惱まされつゝ、室の外に樣子を窺つて居た夫人の許へやつて來た。夫人は夫が仕事をやり損じ、計畫が挫かれたのでないかと想像してゐた。そして夫が非常に惱亂した樣子で出て來たのを見て、氣の弱い事を責め汚れた手の血潮を洗ひにやつた後で罪を二人の侍臣共に負はせるために、自分はその劍を持つて血を彼等の頰に塗りに再び室にはゐつて行つた。

夜は明けた。隱す術もない殺害事件もそれと共に知れ渡つた。**マクベス**夫婦はさも悲しさうな顏をして、暗殺者は侍臣共に相違ないと（懷劍が侍臣達の側にあり二人の顏は血にまみれてゐた）力を籠めて保證したけれども、凡ての人の疑惑は**マクベス**の上に注がれた。こんな愚かな侍臣共が殺したと疑ふよりも、**マクベス**が殺したと思ふ方が餘程妥當であつたからである。王の二子は直ちに難を避け、長男の**マルコルム**は英蘭（イングランド）の宮廷にのがれ、弟の**ドナルベイン**は愛蘭（アイルランド）に走つた。

王位を繼ぐ筈の王子達が斯くして國を立退いたので、血の續いてゐたマクベスは當然王の位に卽いた。茲にあの妖婆達の豫言は文字通り實現せられたのであつた。

マクベスも夫人も思ひ通りに王位にはついたものゝ、マクベスは王となるとも其の後位を繼ぐものは彼の子ではなく、バンクォーの子であると言つた彼の妖婆達の豫言を夢にも忘れる事が出來なかつた。唯バンクォーの子孫に榮えを與へる爲に自分達の手に血を塗り、此の怖ろしい極罪を犯した事を考へると、無念なのでいつそバンクォー父子を殺害して、之まで自分達の場合に不思議にも適中した妖婆達の豫言を避けやうと決心した。

二人は此の目的の爲め或日大宴會を開いて重立つた貴族達を盡く招待した。中でもバンクォーとその子フリヤンスとは特に鄭重な招待を受けた。其招待に出席するためにバンクォーが夜になつてから宮殿へ來る路には、マクベスの命を受けた刺客が待ち伏せしてゐて、バンクォーを刺し殺した。然しフリヤンスは爭鬪の最中に遁

れてしまつた。このフリヤンスの子孫からスコツトランド歷代の王が出でその後裔であるジエームス六世は英蘭のジエームス一世となつてスコツトランドとイングランドとの兩國を併合君臨するやうになつたのである。

食卓についてからも王妃マクベス夫人は、極めて愛想よく且つ上品な態度で、女主人らしく禮義を正し、萬事に氣を配つて座にある凡ての人の心を取り込んだ。マクベスも亦貴族達と打ち解けて語りながら、これで親友バンクォーさへ來ればもう國内の高貴の人々は凡て自分の宮殿の中に集つた事になるのだと言ひ、バンクォーの來ないのは、怠慢の罪であつて、何か悲しい不幸が起つたのでなければいゝがなどと語つた。丁度その時、暗殺されたバンクォーの亡靈が室に現れて、マクベスが今座らうとした椅子に腰を掛けた。マクベスは元より勇敢な將軍であり、どんな惡魔とでも平然として對面する事が出來たのであるが、此の怖ろしい幻影を見た時ばかりは驚愕の餘り顏色は土の樣になり、亡靈を凝視したまゝ全く魂を奪はれて立つ

てゐた。王妃にも貴族達にも何の幻影も見えなかつたので、**マクベス**が空席を凝視してゐるのを見て（皆はさう思つた）不意に精神が錯亂したものだと思ひ、妃は夫の耳に、そんな物が見えるのは、**ダンカン**王を殺さうとした時に劍が空中に見えたのと同じ幻影だと囁いてたしなめた。然し**マクベス**は亡靈を見つめながら、人々が色々と言ふのをも聞かず狂ほしい言葉を叫び續けた。然もその言葉が餘り意味有りげなので、妃は怖ろしい秘密が露見する事を恐れ、**マクベス**は折々こんな病氣に惱まされるのであると虛僞の口實のもとに皆に斷り大急ぎで客を歸らした。

こんな怖ろしき幻影に捕はれてゐたのは**マクベス**ばかりでなかつた。**マクベス**も王妃も共に毎夜毎夜怖ろしい惡夢に惱された。然し殊に兩人を苦しめたのは**バンクー**の血よりも、むしろ逃げた**フリヤンス**であつた。**フリヤンス**からこそ代々王位に即くべき王者が生れるであらうと信じてゐたからである。此の悼ましき心配の爲め二人の心は少しも平和を得なかつたので**マクベス**は遂に、今一度妖婆達を探ね出し

何うすれば良いかと聞かうと決心した。

マクベスは妖婆達を荒野の洞窟に訪ねて行つた。妖婆達は其所で**マクベス**の來るのを豫知して、怖ろしい呪詛藥を用意し、惡靈共を呼び出して未來を占はしめやうと待つてゐた。その呪詛藥と言ふのは蛙、蝙蝠、蛇、大蜥蜴の眼、犬の舌、小蜥蜴の脛、梟の羽、惡龍の鱗、狼の牙、海の毒鰻の咽喉、魔女の木乃伊、毒人參の根（これは暗夜に堀つたのでないと利かない）山羊の胆汁、猶太人の肝、墓の上に根を張つた櫟の小枝、死兒の指、こんなものを皆寄せ集めて大釜の中で煮出し、煮え過ぎると狒々の血で冷し、これに自分の子を食つた牡豚の血を注ぎ、人殺しの絞首台からとつた油火にくべて造るのである。この呪詛の藥で妖婆達は惡靈を呼び出し問ひを掛けるのである。

妖婆達は**マクベス**に向ひ、自分共がその疑問を解かうか、それとも又師匠である惡靈に願はうかと尋ねた。**マクベス**は今見た物凄い儀式に怯ぢる氣色もなく勇まし

く答へた。「師匠とやらは何處にゐる。予に會はせよ」。そこで妖婆達は三つの惡靈を呼び出した。まつ先に現はれた惡靈は兜を被つた頭の姿で、**マクベス**の名を呼びながら、**フアイフ**の領主に用心せよと言つた。**マクベス**はその注意に感謝した。それは**マクベス**が**フアイフ**の領主**マクダツフ**に嫉妬を受けてゐたからである。

第二の幻影は血まみれになつた小供の姿をして現れて、**マクベス**の名を呼び、怖れる事はない、人間の力なんか鼻であしらへ。女に生落された者で、**マクベス**を害し得るものは無い。殺伐に、大膽に、決行せよと勸めた。そこで**マクベス**は叫んだ「では**マクダツフ**、生きてゐろ、汝を恐れる必要はないが念のために運命から證文を取つて置かう。汝の息の根をも止めてやらう。予の憶病な根性を叱り附けて、雷が鳴らうと、平氣で眠つて居られる樣にするために」。

その姿が消えたかと思ふと、第三の惡靈が冠を被つた子供の姿をして手には木の枝を持つて現れた。その子供は又**マクベス**の名を呼んで、あの大きな**バーナム**の森

が、**ダンシナーン**丘の上へ攻寄せて來るまでは、戰に負ける事はないと言つて、**マクベス**に謀反を恐れる事はないと力づけた。**マクベス**は叫んだ。「愉快な豫言だ。絶妙。だれが森を引きぬいて、地に生え着いてゐる木の根を動かし得るものぞ。自分は人並の壽命を保ち、不意に慘殺される樣な事の無い事は判つた。だが、まだ一つ聽きたくて堪らん事がある。こら、此事も汝の力で告げられるなら言へ……**バンクオー**の子孫が此國に君臨することがあるのか。」此の時大釜は地に沈み、音樂が聞え始め、帝王らしい八つの陰影が**マクベス**の側を通つた。しかもその最後には**バンクオー**が居りその手には鏡を持つてゐた。それはまだまだ澤山居る事を示してゐるのである。そして血みどろになつた**バンクオー**はその子供等を指して**マクベス**を微笑した。**マクベス**はこれを見て、さてこそこの子供等が後に**スコツトランド**に君臨する**バンクオー**の子孫であると知つた。その後妖婆共は**マクベス**に義務と歡迎との意を表するために靜かな音樂につれて踊りながら消え去つた。これ以來**マクベス**の思

想は殺伐凶暴になつた。

マクベスが妖婆の崛を出て初めて聞いたのは、今や**イングランド**に在つて、**マクベス**を倒し正嫡、**マルコルム**を王位に卽けやうとして、**フアイフ**の領主**マクダツフ**が、軍勢を集めてゐた**マルコルム**の許へ遁れて行つたと言ふ報知であつた。**マクベス**は狂はんばかりに憤怒して、**マクダツフ**の城を陷れ、後に殘つて居た妻子を殺し、續いて**マクダツフ**と少しでも關係のある者共を盡く殺してしまつた。

この樣な慘酷な行動を見た貴族達は皆、**マクベス**を疎んじ、遁れ得る限りは、**イングランド**で起した大軍を率ゐて進軍しつゝある**マルコルム**と**マクダツフ**の軍隊に投じ**マクベス**を怖れて遁れ得なんだ者までも祕かに敵軍の勝利を願つてゐた。**マクベス**の新兵はのろ〳〵と進軍した。皆此の暴君を憎み、敬愛してをる者は一人だに無く悉く**マクベス**を疑つてゐた。茲に至つては**マクベス**も遂に叛反人の爲に殺されたとは言へ、今は墓場に快よく眠り最早及も毒も、國內の怨恨(うらみ)にも、國外の敵軍にも惱

まされない平靜な狀態に居る、自分が暗殺した**ダンカン**を却つて羨むやうになつた。

斯んな最中に**マクベス**の隱謀の唯一の相談相手であつた王妃が死んだ。夜な夜な二人が惡夢におそはれた時にも、**マクベス**は一時的な慰安を王妃の胸に求めてをつたのであるが、さしもの王妃も犯した罪を後悔する念と、人民からの憎しみに耐へ兼ねて自刄したと信ぜられてをる。このために**マクベス**は誰一人自分を愛し、心配して呉れる者もなく、又今は陰謀を打明ける一人の友達さへもない天涯孤獨の身となつた。

マクベスは命だに惜しからず。却つて死をさへ願つてゐたけれども**マルコルム**の軍隊が近づいて來たことを聞いた時には流石に昔の勇氣が心に湧き起つて「甲冑を身に著けて」死なうと決心した。其の上妖婆共の便り無い約束を覺束なくも信じて女に生み落された者で、自分を害し得るものはなく、**バーナム**の森が**ダンシネーン**の丘の上へ攻寄せて來ない限りは敗けないと言つた事を思ひ出して、左樣な事は有

り得ないと信じてゐた。そこで彼は敵の攻撃を防ぐに屈強な自分の城に立て籠り不快氣にマルコルムの近づくを待つてゐた。ところが或日一人の使者が蒼白になり、怖れ戰きながら駈けて來て、言葉も絶々に報告した所によると、その男が丘の上で見張りをしてバーナムの方を見てゐると、森が動き始めた樣に思はれると報告したマクベスは叫んだ、「嘘をつけ。畜生、もし嘘だとすると、すぐ手近の木に汝を吊して、餓死する迄打棄つておくぞ。もし事實なら予をさらしたつて關はぬ。」今やマクベスの信念は搖ぎ出し、惡靈共の言つた同じ言葉を疑ひ始めた。實はマクベスはバーナムの森がダンシネーンに來る迄は恐れる必要はなかつたのである。それに今森が動き出した、「若し彼奴が報告する通りだとすると、武器を取つて打つて出ろ。逃げても止まつても駄目だ。あゝ日の光を見るのが厭になつた。早く予も死んでしまひ度い。」此の絶望的な言葉を殘して、今や城のあたりまで、攻め寄せて來た敵軍の中へ踊り込んだ。

見張りの男が森が動いて來ると思ひ込んだ奇妙な出來事は何でもない事だつた。マルコルムは計略のうまい將軍だつたので、本當の兵數を敵に知らさない爲めに軍隊がバーナムの森を行進する時には、兵士に一本づゝの木の枝を切つて持たせたのであつた。此の樣に枝を前に翳して進んだために、遠くから見てゐた番兵を驚かしたのである。さて先に惡靈が述べた言葉は、マクベスの考へてゐたのと意味こそ異つてはゐたが、事實となつて現れたのである。かくてマクベスが頼んでゐた命の綱は切れた。

兩軍の間に激しい戰は始まつた。味方の兵士達も事實、皆マクベスを憎みマルコルムやマクダツフの軍隊に加勢してゐたため、誰一人援助するものも無かつたけれどもマクベスは猛然と勇氣を振ひ起し死物狂ひで、手向ふ敵を片端から切り捨てゝ遂に大將マクダツフの側まで來た。併しマクダツフを見るや、誰よりもマクダツフに注意せよと惡靈に言はれてゐたことを思ひ出して引返さうとしたが、戰の初めか

らマクベスを探し廻つてゐたマクダツフは、それを遮つて引戻し、二人の間には激烈な戰が始つた。マクダツフは自分の妻や子を殺した罪をひどく責め、マクベスは彼の家族を殺した事を既に深く〳〵悔ひてゐたので、戰ふとしなかつたが、マクダツフは飽迄も強ひて、遂には暴君、殺人者、地獄犬、惡黨などと罵つた。

そこでマクベスは、女の落した者で自分を害する者はないと言つた惡靈の言葉を思ひ出して、會心の笑をもらしながら言つた。「無駄な骨折だ、マクダツフ。其劍で予に血を流させることが出來るやうなら、斬ることの出來ない空氣にも切形が附けられやう。予の生命には呪ひがしてあるから、女に生み落された男なんかに殺される虞れはないぞ。」

「その呪ひは駄目だと思へ。汝が常住信仰してゐる僞つきの惡靈に聞き直して來い。マクダツフは凡骨のやうに女の腹から生れたのでないぞ。おれは母の腹を裂いて生み出された人間だ。」

「おのれ憎むべき、其舌の根」とマクベスは最後の頼りの綱も切られて、震へながら叫んだ「あの嘘つきの惡魔共め。兩義の言葉で人を欺き、耳へは約束を守るらしく聞かせておいて、肝腎の望を失はせる惡魔共め。もう信ずる事は出來ないぞ。……汝とは戰はない。」

「ちや降參しろ。命だけは助けて見せ物にしてやらう。珍らしい妖怪の樣に、そして看板に「評判の暴君」と書いてやらう。」

「降參なんかするものか」とマクベスは捨鉢になつて勇氣を振ひ起し、「あの青二才のマルコルムの脚下で地面を嘗めたり、愚民共に呪ひ辱められる樣な目に逢ふものかい。たとへバーナムの森がダンシナーンにやつて來やうと、女に生み落されない汝が立向はうと、最後の運試しをして呉れる。」と斯く狂はしく言ひながらマクダツフに立ち向つたが、激戰の後遂に敗れ、その首は斬られて、若い正嫡の王マルコルムに贈物とされた。マルコルムは久しい間叛逆者の惡計のために剝ぎ取られてゐ

た政權を取り戻し、ダンカン温和王の後を受けて、貴族や人民の歡呼のうちに王位に卽いた。

新譯沙翁劇物語

【正價金貳圓也】

大正十一年十月十五日印刷納本
同　年十月二十日發　行

著作者　鹽見清
同　櫻子
發行人　武藤欽　京都市下長者町油小路西入
印刷人　早崎鶴之助　京都市木津屋橋西川東入

不許複製

發行所　東京市神田區表神保町三番地（振替口座東京六〇〇六一）
文獻書院
京都市下長者町油小路西入（振替口座大阪六三〇九二）

文献書院新近刊書目

竹友藻風著 高等英文學註釋叢書 全一冊 金壹圓五拾錢

本院編輯部著 名著梗概叢書 每月五種發行 一冊 金三拾五錢

友枝照雄著 最新教科叢書 國文新講 四六版二百五十頁 正價壹圓八拾錢 送料拾五錢

藤代禎輔監修 近代獨逸文學叢書 全一冊 金壹圓五拾錢

片山孤村著 現代の獨逸文化及文藝 四六版二百四十頁 正價貳圓 送料拾參錢

加藤順三著 近松戲曲新研究 四六版三百頁 正價金貳圓 送料拾五錢

藤代素人著 文化境と自然境 四六版三百頁 正價貳圓 送料拾五錢

秀氏祐祥編校註 蓮如上人御文全集 菊版約五百頁 眞鍮葉入 正價四圓 送料貳拾參錢

手島文蒼著 苦悶の釋迦 四六版三百餘頁 正價貳圓貳拾錢 送料拾七錢

太宰衛門著 戲曲嗚呼蓮如 四六版二百餘頁 正價壹圓七拾錢 郵稅拾五錢

大西利夫著 大西利夫脚本集 四六版百八十頁 正價壹圓五拾錢 送料拾參錢

卷